

同窓会だより

29

川越キャンパス、応用化学科の近況

応用化学科 主任 石井 茂

東洋大学は2012年に創立125周年を迎えますが、それに先立ち、川越キャンパスでは2011年に創立50周年を迎えました。川越キャンパスは1961年に工学部（機械工学科、電気工学科、応用化学科）が開設され、翌年の1962年には土木工学科、建築学科が増設されスタートしました。1965年3月に第1回の工学部卒業生273名、応用化学科としては73名の卒業生を送り出し、以来50年間で工学部を卒業した学生は約37,000名、応用化学科の卒業生は約5,900名、2012年には6,000名を越える予定です。

この50年間で大学を取り巻く環境は大きく変化し、社会のニーズに応えるため川越キャンパスにおいては、2009年4月から工学部は理工学部・7学科、情報工学科は総合情報学部へ改組され、川越キャンパスも大きな変貌を遂げました。多くの卒業生が利用した鶴ヶ島駅から西門までの通学路にはコンビニ、アパート等が建ち、新西門・こもれびの道が整備され、キャンパス内の建物も更新され、設立当初からは一新されました。さらに大学として川越キャンパス連合育成会が立ち上げられ、各学科にあった卒業生の親睦団体である同窓会のまとめ役として卒業生、在学生、教職員との交流に寄与する目的で、

応化同窓会も2011年から加入しています。

現在の応用化学科も様変わりし、設立当初から在籍していた井原、松永両先生が2011年3月に、そして、第3回卒業生である又重先生が2012年3月で退職され、現在13名の専任教員で、1964年に建設された応用化学科実験棟の跡地に新築された応化・情報実験棟（1997年）と、応化第2実験棟（旧第3実験棟、1977年）の二箇所学科運営を行っています。

近年の入学志願者状況は、川越キャンパスのhard & softが更新され、学部改組も重なり、減少傾向であった入学志願者も2009年以降は増加し、2011年には約5,800の志願者数に達しました。応用化学科もバブル期をピークに志願者数の減少が続き、2008年にはピーク時の約半数まで志願者数が落ち込みましたが、その後志願者数が増加し、2011年には約1,300名が応用化学科を志望していました。受験生の学力低下、理科離れが問題となって久しいですが、応用化学科では少なくとも受験生の増加傾向にあるので、これから更に発展するため、教職員一同努力しますが、特に就職に関して超氷河期と言われる昨今、OB・OGのご協力を期待するところであります。

川越キャンパス開設50周年

理工学部長・工学部長 吉田 泰彦

2011年10月1日、川越キャンパス開設50周年記念式典が盛大に行われました。川越の地に「産学協同教育の旗印を掲げて東洋大学工学部が創設」されたのは昭和36年5月です。当初、機械工学科、電気工学科、応用化学科の3学科で発足し、翌年には土木工学科と建築学科を加え、昭和41年には大学院工学研究科がそれぞれの学科に連携して整えられました。産学協同の実践の場として工業技術研究所が東洋大学附置研究所として昭和50年に誕生し、社会の要請に先駆けて昭和51年には情報工学科が増設されました。平成8年には電気電子工学科・菅野卓雄教授のナノテクノロジーと応用化学科・掘越弘毅教授のバイオテクノロジーを融合したバイオ・ナノエレクトロニクス研究センターが、平成13年にはコンピューショナル情報工学科、平成17年には機能ロボティクス学科が設置されました。その間に大学設置基準の大綱化による専門課程と教養課程の一本化や大学院の専攻再編・融合化など、教育システムの改革が行われました。平成21年より工学部を解消し、理工学部と総合情報学部の2学部へと発展いたしました。



昭和40年頃の川越キャンパス

理工学部は機械工学科、生体医工学科、電気電子情報工学科、応用化学科、都市環境デザイン学科、建築学科の6学科に再編され、総合情報学部は文理を融合した総合情報学科・1学科として発足しております。現在、工学部所属学生としては4年生を残しておりますが、川越キャンパスで学び社会に飛び立ちました卒業生は工学部・工学研究科を併せて37,000人強にものぼり、それぞれの専門分野で活躍しています。

東洋大学は学祖井上円了博士の「諸学の基礎は哲学にあり」を「建学の精神」としており、大越諄初代工学部長は産学協同を工学部の理念として、川越キャンパスで学祖の精神を工学への応用の実践の場といたしました。また、工学部創設30周年記念誌において当時の工学部長・山下忠孝教授は、「科学技術の革新、社会の進歩に柔軟に対応できる思考力と独創性、そして豊かな人間性を併せもつ技術者の育成」、「真理の生産者である第一線研究者育成よりは、知識を蓄積し、体系化し、集約化し、総合化できる技術者を育成したい」との教育理念を実践し、先人の方々の努力と研鑽により川越キャンパス・工学部より「東洋大学の建学の精神」を体現した多くの堅実な技術者が育ちました。平成21



現在の川越キャンパス

年度より工学部から再編されました理工学部も「諸学の基礎は哲学にあり」の「建学の精神」を浸透させ、『哲学をもつエンジニアの育成』を目的に、理工学部教職員一丸となって努力していきます。

大学の存在意義は「教育・研究・社会貢献」にあります。

教育に関しては各学科それぞれの専門分野に則したカリキュラムと、一般および理工学の基礎教育科目が充実していますし、理工学部への再編後は順調に入学希望者も増加する傾向にあります。大学における研究は教育につながるものであり、研究で培われた成果を教育に反映

することが大学本来の役割であります。研究無くして大学の存在意義はありません。また、社会貢献においても大学の研究成果があるからこそ産業界との連携が行われます。大学において研究が無ければ、教育も社会貢献も有り得ません。理工学部の社会貢献に関しては特に地域に根ざした貢献が望まれておりますが、その実現には地域の方々と卒業生の方々の協力が必要不可欠です。工学部創設以来50年間の成果に感謝しつつ、さらに充実した教育・研究・社会貢献を実現し、学生・院生・卒業生・教員・職員の協力・努力の下、地域の方々とともに発展する揺るぎない東洋大学理工学部の構築を目指します。

津波と同窓会と地ビールと

元応用化学科講師 又重 英一

3.11平和な日本を襲った予期せぬ未曾有の震災と津波。自然の破壊力の恐ろしさを改めて思い知らされた。加えて、人間の驕りが引き起こした原発の事故。生まれ育った故郷が波に呑まれ、放射能にまみれた。テレビに繰り返される画像はこの世の地獄絵。ただ涙するばかり。希望を捨てることなく東北人の粘り強さで復興されんことを祈るのみ。

遠く消えていきそうな絆を考え直す時が来た。

この津波災害に比べると被った波は小さいが、そのたびに同窓会は三回変遷した。

若者は何時もその時代の体制が不満で、逆らい、離れようともがく。「守破離」と言う剣道の言葉がある。その体制を良く守り熟知したうえでその体制を破り、前進・発展させることが大事の意味だ。1969年（昭和44年）大学移転問題を口実に、ゲバ棒（角棒）を持った白山校舎を占拠し立てこもっていた学生たちが鶴ヶ島駅に降り立った。情報が工学部を駆け巡った。当時、

機械や薬品がある無防備な川越校舎が革命を叫ぶ過激な学生たちの拠点校として狙われていた。

その時、敢然と西門に立ちはだかった教員は応化の赤星先生と山下先生だけだった。両先生の勇氣ある行動に、目的を異にするかもしれないが、助手になったばかりの小生が鼓舞され、ゲバ学生と体育会学生の間で割って入った。西門をかわして、北門から入ってきた過激学生とつさにゲバ棒を自治会室に格納させ、その周りを体育会の学生達に取り囲ませた。ゲバ棒を一本たりとも持ち出さない様、命じた。当然ゲバ学生は小生に食って掛かってきた。彼らに、自分はOBで両者の見方であることを告げた。過激学生等の目的は工学部を占拠する事で、長期居座りの口実を作ることにある。詳細は略すが、新任の杉浦先生とともに体育会との衝突を無事回避でき、逆に体育会委員長とゲバ学生の（黒幕はいつの間にか消えていた）代表とを握手させた。体育会OBと教員の立場が功を奏した。大

学紛争では、日本中の大学の古き体制がかなり見直されたが、ありとあらゆるものが破壊された。2期生の竹迫弘樹先輩等諸氏によって培われ、卒業生・学生と教職員の絆である「同窓会」（東応会）も例外ではなかった。

工学部20周年を迎えんとする、昭和54年(1979)11月17日有志の努力で「応化同窓会」が再度設立・再開された。門田先生が大切に保管されていた前同窓会の残金を基に復興がなされた。一期生の秋元友美会長（残念ながらこの原稿執筆中に氏の訃報に接した。）を中心に、大熊先生や岡崎先生の努力で会計が管理され、会報は毎年号を重ねその足跡を残し、名簿は着実に会員の数を増していった。しかし、応化の同窓会は幹事会、総会や懇親会とも回を重ねるに従い、出席者が減少し、何時も同じ顔ぶれだけになった。たまたま出席された卒業生に同年代の同窓会の出席が無く、寂しい思いをさせていた。同窓会の命である名簿も「個人情報保護法」で、作れなくなり、名簿を開示し、学生の就活をサポートすることも困難になった。学生には同窓会の存在価値が見えず、同窓会意識が低下し、会費納入率も減少・低下してきた。

2004年頃、米山工学部長の発声で川越キャンパス全体の同窓会を束ねる組織を作る準備委員として建築の松下先生を中心に指名された。同窓会が順調に機能している学科は建築、機械、と応化だけ。同窓会を解散した学科、持続が危うい学科、まだ卒業生も出ていない新学科と様々で、運営に必要な会費徴収が懸念された。応化同窓会は、すでに独自に会を維持発展させている。今更、連合育成会に入るメリットが見えない。応化は卒業と同時に卒業生全員会員と見なし、会報を送るのに対して、連合は会費を納め会員になる意思表示した会員のみで会報を送る。

等々問題点や不満があり応化は、連合育成会の傘下に入ることを拒否した。

応化同窓会に混乱と停滞をもたらした責任を取って、小生は学内幹事を辞した。

しかし、2006年7月9日発足した「工学部連合育成会」は動き出していた。今までの応化同窓会は校友会から認知されず、むしろ敵対関係としか見られなかった、が連合育成会は校友会の下部組織として認知され、大学からも認知・位置づけがなされ予算まで付いた。さらに、同窓会が無かった学科にもその組織づくりが始まり、会費も徴収され始めた。大学からの支援金は、応化の分も含まれており、卒論発表会における最優秀者を表彰する形で還元された。就活中の学生へOB・OGの助言の場を設け、工場・現場等の見学バスツアーへの援助、授業「総合D」では最前線で活躍している卒業生の体験談を話してもらい、より絆を強め、学生の同窓会意識の強化が図られた。応化同窓会が連合に加入するまで、各学科間のバランスを取るために、授業総合Dのまとめ役を仰せつかった小生は、講師に8期生の遠藤壽氏にお願いし、育成会の懇親会に応化卒（31期）の三遊亭遊喜（本名；渡辺邦弘）に座を盛り上げてもらった。講演会には、応化卒(30期)の川越のコエドブルーアリーの熊倉宏明氏に「ビールの造り方」を講演してもらった。

この講演がきっかけで、準備委員と生協理事の立場を利用し、小生の提案で育成会ブランドの「東洋大地ビール」が作られる事になった。中身のビール製造は熊倉氏、ラベルは建築卒の切り絵作家百鬼丸氏に、販売は生協にお願いすることにした。熊倉氏はビールの造り方をドイツで修行してきた。氏の醸し出した東洋大地ビールの姉妹品5品目が、モンドセレクションのビール部門で賞を総なめにし、世界ナンバーワンに輝いた。「同窓会だより 27」参照。かくして、相互の絆を強化するであろう、東洋大地ビールの格も上がった。

しかし地ビールに関係なく、学生達の度重なる飲酒による事故で、学生への飲酒禁止が求められた。入学時「今日から君たちに紳士として対応します。」の大越工学部長の一言によって、大人としての意識改革が植えつけられた、50年

前のおおらかな工学部設立当初が懐かしい。

かくして生協店舗でビールの展示販売が困難になった。そこで、卒業生に販売網を拡大し、得た利益の一部から、生協が育成会に寄付の形で著作権使用料を支払い、広く現役学生に還元できるように、手続き中である。卒業生の皆様には、仲間の絆を強化し、学生を支援する、本格的東洋大地ビールの味を、ゆっくりご賞味いただきたい。330ml 1本350円で3本、6本、12本、24本単位（箱代送料代別）。注文は、EL03-3943-9603 FAX:03-3943-9605東洋大学生生活協同組合に。

工学部50周年を迎えた2011年、応化同窓会は育成会の傘下に加盟した。

齊藤誠会長を中心に、大学の理事になられた大熊先生や、応用化学科の主任教授になられた石井先生、ベテランの岡崎先生や、若手の相沢先生とともに、大勢の幹事の皆さん方による新体制で、新たな同窓会が復興・発展されんことを期待しています。赤星・山下先生に習い、幹事の皆さんの率先垂範が同窓会を活性化されんことを願う。人と人を結ぶ絆を大事にしてもらいたい。

応化同窓会の復興とますますの発展を祈念して 乾杯！ 老兵は去るのみ！ 又重英一
（又重英一先生は、平成24年3月に定年退職されました。）

【交友ひろば】

50周年雑感

応化第2期生 外山一田中研究室 鈴木 進治

思えばもう50年ほども前にこの大学に入学し、現在は定年を迎え、何とか一人前に生活をしている自分がある。振り返ってみると実にさまざまな事が蘇って来る。我々が入学した昭和37年という、貿易の自由化時代に突入し、国際化に向かって頑張るぞという高ぶる気持ちがあった時期のように思う。一方でこの年に米ソの対立が深刻となりキューバ危機が訪れた。まさに核戦争危機一髪というところまで来ていた。当時のソ連首相、フルシチョフの苦渋の選択だったと思うが、キューバから核兵器撤去を発信し収束した。この3・11災害での福島原発の後始末で未だ先が見えてこない原子力というモンスターの悪行を考えると、やはり核の深刻さ、恐ろしさを強く感じる。この年には原子力研究所の国産第1号機が臨界点を達成しているので特に印象深い事柄である。

大学生活はごく平凡に進行していったが、研究室に入る専門課程になると自覚も芽生え結構頑張った思いもある。卒論時代は特に思い出が

深い。学部、修士課程と関連がある研究テーマで外山先生、田中先生のご指導を頂いた。もう少し真面目に研究に取り組んでいたら学者の道を選んでいたらかもしれないが、企業を選択する方向となった。外山先生からは研究の足しにと毎月、当時の金で5千円が援助された。今でも「書物を買う足しにきなさい」と言われた先生の言葉が耳に残り、懺悔の思いで心苦しい。当時の女性秘書の方はご存知ではなかるうか。本代になったのはたった一冊のみであったのはまことに罪深くその後の反省の原点になっている。

研究活動以外の楽しい思い出もたくさんある。山下先生、脇先生が囲碁の有段者であった関係で、囲碁人口が割合に多かったと記憶している。井原先生にもご指導を頂き、基礎的なことを勉強させてもらった。大学生になってからの囲碁入門では遅きに失し、上達は押して知るべしで、卒業時点では恐らく4、5級程度ではなかったろうか。後になってホテルオークラの

社長であった野田岩次郎氏が経団連の会合で囲碁の話題に入っていられなかった悔しさから猛勉強して、70歳から始めて何と7段位を取得されたという話を聞き、人間何歳になっても努力次第でどうにかなるものだと痛感したものである。幸い自分も努力の甲斐があって何とか人前で打たせていただける程度にはなることが出来た。釣りの世界でも思い出に残ることが多い。亡くなられた伊藤先生とは当時運営されていた大学奥只見寮まで釣り旅行に出掛けたり、松永先生とはポンコツ車であちこちに行った事も良き思い出である。

大学生活における部活動は互いの絆を強め、社会に出てからも太いパイプとなり大いにプラスになることが多い。工学部には当時ESSと言うクラブがあった。英会話研究会である。顧問は英語教員の堀内エミ先生であった。今で言う帰国子女だったと聞いた事がある。流暢な英語は今でも忘れられない。その頃は時折りの合宿をはじめ語学力向上を目指して一生懸命であった。初代部長は機械学科の荒井氏で、浦和市にあるご実家で8名程が3日間も合宿させて頂いたことがある。食事はお母様が準備してくれ、今でも忘れられない。お陰で関東大学ディベティングコンテストでは早稲田、慶応、日本女子大をはじめ国立大も参加する中、3位の栄冠を手にする経験もした。この頃の英会話力がその後の企業生活でも大いに役立ち、海外調査や契約問題などにも対応できた。他にも、応化の一年先輩で現在も上場一流企業の副社長を務めているある方から、この時の語学研鑽が海外赴任でも大いに役立ったとお聞きしている。絆という点でクラブ活動というものの有難みを強く感じている。この時の部員が年に一度の懇親会を持ち、温泉地などで旧交を温めているが、今年は皆さんの年齢も考え、又大学の50周年でもあり、川越の地で開催する事になった。望郷の念とでも言おうか、50年ぶりの里帰りである。中には車椅子の方もおり、同期の森山氏が車でお連れすることになっている。彼は建設会社の会

長をされており、東洋大学卒業生も多く採用して頂いている。当日は夕方から鶴ヶ島駅近くで宴席を持ち、近くのホテルに宿泊、翌日は大学の視察を行う事になっている。おそらく大きな変貌に皆、目を丸くするに違いない。

非常に残念な事だが、大学の学生担当課に調べて頂いたところESSクラブは現在実体がなく消滅したようだ。

卒業時、就職面では脇先生に大変お世話になった。紹介頂いた会社は自動車関連企業で、ある分野の製品が国内シェア80%を誇り、株価も高位安定の超優良企業であったが、化学分野が移転せざるを得ない状況が発生した。これを機会に転職し、食品関連企業に移った。ここでは研究所生活が長かったが、全体を見る立場になり「研究所の運営は楽しく研究できる環境を醸成する事」を念頭に置いた。その後は商品企画、ブランド管理、意匠デザイン部門を統括し、年商100億を越すヒット商品も幾つか上市する事が出来、現在でも好調を維持しているものが幾つかある。手がけた商品をスーパーなどでの買い物の際に見ると感慨深いものがある。研究所時代の平成2年、応化同窓会の秋元初代会長より依頼され、第2代の同窓会長をお引き受けすることになった。秋元氏は現在療養中で一日も早いご快復をお祈りしている。

その後工学部30周年記念行事、東洋大学創立100周年記念行事等を経て、現在第5代目の会長には齊藤氏が当たられている。そして今年、工学部創立50周年、来年は大学創立125周年という節目を迎えている。工学部は理工学部となり新しい学科も多くなった。同窓会活動も連合育成会への加入で新しい動きが始まった。応化同窓会では数年前から同窓会加入者が減少し続け、会費納入ゼロと言う年まで発生する始末で、同窓会の存続自体が危ぶまれる状況にもなったが、これからは連合育成会との連携も深め、発展を目指さして行くことになろう。育成会の業務をお手伝いし痛感するのは、卒業生の全般的な価値観の変化である。時代がそうさせている

のか、個人主義的な面が強くなっていると感じざるを得ない。卒業式に合わせて加入促進と同窓会終身会費の徴収を行っているが、なんとも関心が低く、緊急に改善策を講じる必要があるように思う。同窓会発足当時は研究室内での人間関係の密度は濃かったと感じている。先生方も非常に協力的で学生と同窓会との橋渡しも快くお引き受け頂いた。この所、育成会関連の行事で時折り大学に出向く機会があり、先生方とお話する事があるが、押しなべて、人間関係の希薄さを嘆いておられる。ただ、嘆いているだけでは困るので、何らかの策を練って欲しいものである。平成15年に個人情報保護法が施行されて以来、何事につけても情報がどうのこうのといつて、出来ない事への言い訳としか取れない事態が蔓延しているように思えてならない。これは社会全般にわたって言える事で、過剰反応がもたらす弊害を看過できない。研究室内部でも同窓会の意義など上手に伝達していただければ幸いである。同窓会幹事については一言述べさせてもらいたい。いつも同じ面々が事務処理を行っている。本当にご苦労様と言いた

い。今まで曲がりなりにも同窓会機能が維持されてきたのはひとえに彼らの情熱と努力の結果であろう。人事面では役員になったら一生役員と言う事になりかねない。大学の要職にある大熊教授や岡崎教授には運営面でいまだに大事な部分を担って頂いている。また又重先生には骨身を削って活動して頂き、合わせて感謝の意を表したい。幹事一同は努力し、何とか円滑な同窓会運営が出来るよう目指しているが、マナー化も否めない。どんな組織でも新しい風が入らなければ新しい価値観に対応できないことが多いので、同窓会の発展のため、新規幹事の参加加入を強く願うものである。関心のないところに発展はありえない。

この3月には松永教授と井原准教授が定年退職された。我々が直接ご指導頂いた先生はお二人が最後になる。お疲れ様でした。どうか健康に留意され楽しくお過ごし下さい。最後に東日本大震災の被災地の皆様にご心よりお見舞いを申し上げ、併せて、福島はじめ原発問題に直面している皆様が一日も早く元の生活環境を取り戻せるようご祈念し、締めくくりと致します。

初代応化同窓会長、秋元友美氏のご逝去を悼む

応化2期生 鈴木 進治

応用化学科の同窓会設立にご尽力頂き、10年もの永きに渡り会長職を務められた初代会長の秋元友美氏が11月に肝臓がんのためご逝去。謹んでお悔やみを申し上げます。

昨年5月の応化同窓会幹事会にご出席頂いたのは4年振りの再会であり、とても懐かしかった事が思い出される。その時お聞きしたのは、胃がんの手術をされたが、体調も良くなってきたので出席できたという事であった。その後、同窓会活動にも変動があり応化同窓会も連合育成会に参加する事になった。秋元氏にはお目付け役として役員就任をお願いする機会があり、引き続きご指導頂ける事を楽しみにしていた。

そんな折、メール連絡で「また検査することになってしまったので受けられない」とお聞きした。今思うと、かなり病魔がさし迫っていた状態だったのかもしれませんが。同窓会の環境変化にも関心を寄せられ、体調を押してまでも対応して頂いた事に胸が熱くなる思いです。所用のため葬儀には出席できませんでしたが、平野国雄氏からその時のご様子、安らかな顔であったとお聞きしました。秋元氏の同窓会に寄せる強い想いに対し、心より感謝しご冥福をお祈り申し上げます。秋元さん、安らかに眠り下さい。

平成23年度応化同窓会賞・連合育成会賞

平成23年度の受賞者は以下のとおりです。(受賞者名、所属研究室(指導教員)、タイトル)

秋学期卒業生<平成23年9月>

◎霜垣 竜太 【生命工学(宇佐美)】

キチン・キトサン分解酵素性細菌の探索と性質の解析

春学期卒業生<平成24年3月>

◎塚越 えりか 【食品生物化学(安藤)】

出芽酵母*Saccharomyces cerevisiae*の対トリコテセン耐性条件の検討

◎奥山 恵美 【生命工学(宇佐美)】

耐塩耐アルカリ性セルラーゼ生産菌の探索

◎大原 瑛子 【生命工学(宇佐美)】

耐塩性マンナナーゼ生産菌の探索と解析

◎福島 翔 【物性化学(上田)】

ベンゼン-12電荷移動錯体の(±)-[Co(en)

3]Cl₃への吸着挙動

◎田家 圭一 【物性化学(上田)】

一次元チャンネル内における吸着分子のエネルギー安定性に関する分子論的考察

◎畑山 瑠莉香 【生物工学(川瀬)】

フォトフェントン反応を用いた返流水の難生分解性有機物除去プロセスの開発

◎小野 達也 【機能材料(吉田)】

N-ブチル-N'-フェニルアセトイミドアミンとβ-ケトエステルの反応

平成23年度春学期 連合育成会賞

◎飯野 司 【機能材料(吉田)】

炭素-炭素結合の開裂によるエステルの合成

退職教員のお知らせ

上田貴洋先生が、平成24年3月31日で東洋大学を退職されたことをお知らせいたします。2年間の在職中は主に理工学共通の化学を担当されました。短い期間ではありましたが、応用化学科の教育にご尽力いただき心よりお礼申し上げますとともに、今後とも健康に留意され、より一層ご活躍されますようお願いいたします。

上田先生のご経歴

平成14年4月 大阪大学総合学術博物館・助教授、大学院理学研究科化学専攻を兼任

平成19年4月 職名改正により、大阪大学総合学術博物館・准教授

平成22年4月 東洋大学工学部応用化学科 教授

担当科目：安全化学、物理化学Ⅲ、化学Ⅰ、化学実験

研究室：物性化学研究室

平成24年4月～ 現職(大阪大学総合学術博物館 教授)

東洋大学工学部応用化学科同窓会会報第29号

発行 平成24年4月28日

発行所 東洋大学工学部応用化学科同窓会

〒350-8585 川崎市鯨井2 1 0 0

TEL 049-239-1370

FAX 049-231-1031

印刷所 丸栄印刷株式会社

〒114-0023 北区滝野川1-1-21

TEL 03-3910-5990

FAX 03-3917-0689